

# 観念論と実在論の双曲線 -Fr. シュレーゲル：神話論再考-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学経営学部人文科学研究室 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 信行 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/19032">http://hdl.handle.net/10291/19032</a>

## 観念論と実在論の双曲線

— Fr. シュレーゲル：神話論 再考 —

小林 信行

筆者は2009年刊『人文科学論集』に「美的革命の宣言とその応答」という包括的タイトルの下に論文を連載する旨を記したが、第55、56、59輯で中断したままであった。実は、その後それに振り向けられるエネルギーは、独文著書 *Ästhetische Revolution und Phantasie* (*Studien zu den ästhetischen und geschichtsphilosophischen Ansichten Fr. Schlegels bis 1800*) の完成に傾注され、幸いにも2016年末発刊 (Berlin, LIT-Verlag) の見込みとなった<sup>(1)</sup>。以下は、同独文単著の巻末に掲載されるはずであった *Zusammenfassung und Ausblick* (実際は未掲載) に対応する日本語版の論稿である。だが、同著全体の内容を単に要約・再現するのではなく、そこに重要な流れとして伏在したシュレーゲルがいうところの観念論と実在論の関係に照準を合わせ、全体を捉え直し、かつ、予定された独文著書第二部<sup>(2)</sup>への展望を拓くものである。

### はじめに

若きフリードリヒ=シュレーゲルは、1795年に脱稿した『ギリシャ人のポエジーの研究の(意義)について』(以下『研究論』と略称)と題する論考で、予言者的語り口で読者に問いかける。

神性もまた地上の姿に身を糞して彷徨するのだろうか。(KA I, S. 275)<sup>(3)</sup>

この段階で保留された回答を筆者が補えば、定めし、「ポエジーの普遍的原理、なかんづくその形式を人々に伝えるために」となる。1798年に起草された以下の断章草案の前半部は、上の回答に符合する。

ポエジーは神々を地上にもたらし、哲学は人間を神々の境位へ高める。(PhLj IV-460)<sup>(4)</sup>

周知のように、ドイツ初期ロマン派にとって詩芸術ないしポエジー (Poesie) と哲学 (Philosophie) の総合はいわば至上命題であった。信仰箇条であったと言い換えてもよい<sup>(5)</sup>。そしてシュレーゲルは、1797・98年から世紀転換期の1800年に至るまで、ほぼ一貫してポエジーを「実在論」(Realismus)、哲学を「観念論」(Idealismus)とみなして、両者の関係を巡る諸事項に様々な言葉の変容を加えつつ、「新しい神話」(Neue Mythologie)等のこれまた予言者的言説を世に送り続けたのであった。以下に示すイデーエン96番<sup>(6)</sup>は、ポエジー即実在論、哲学即観念論というテーゼを最終的に確認し、アテネウム誌の読者に宣言した断章であろう。

全ての哲学は観念論であり、ポエジーの実在論以外に真の実在論は存在しない。(IF-96)

「新しい神話」のテーゼに関しては、「神話とは実在的(レアル)なものに対する観念的(イデアル)な取り扱い」ではないのか、と自らに問いかける1798年の断章草案(PhLj II-889)<sup>(7)</sup>をここで示しておこう。

## 1. 古代と近代の二律背反

修業時代の劈頭期、1794・95年のシュレーゲルの最大の関心事は、古代世界と近代世界の然るべき位相関係を問うことであった。すなわち、近代を否定して、古代世界の学問、芸術、国家体制を一方的に賛美することでもなく、また、古代を犠牲にして、近代世界の価値観を一方的に賞賛することでもなかった。シュレーゲルの意図は、両世界に枢要な文化的・政治的・宗教的契機を共に救い上げ、両者の優劣を人類または人間性の普遍史(Geschichte der Menschheit)において解消することにあった。

このようなシュレーゲルの眼前にまず現れた形姿が『古代芸術史』(1764年)<sup>(8)</sup>を著したヴィンケルマンであった。すなわち、古代世界の芸術と人倫の歴史的消長を叙述し、全体としての古代世界の理解に貢献した思想家として立ち現れたのである<sup>(9)</sup>。だがヴィンケルマンの有名なテーゼ、すなわち、

古代人の模倣はわれわれ(近代人)が偉大になるための(……)唯一の方途である<sup>(10)</sup>。(括弧内筆者)、

は若きシュレーゲルが探し求めた事柄の半分を言い表すに過ぎなかった。

ヴィンケルマンは古代人と近代人の二律背反を初めて感じ取った。(LN-236)

これがシュレーゲルのヴィンケルマンに対する応答である。背景には修辭的イロニーにいう賞賛と非難の交替が潜んでいよう。ヴィンケルマンが古代を全体として掌握し、古代世界の芸術の歴史的展開の全容の解明へ展望を開いたとはいえ、彼は古代と近代の絶対的差異を認識し(AF-149)<sup>(11)</sup>、古代芸術の絶対模倣を近代人に要求したに過ぎない。シュレーゲルが拠って立つ立場は、古代芸術の展開を背景で律する「全体の精神」を認識し<sup>(12)</sup>、それを近代世界へ生産的に還元することであった。古代と近代を貫通する芸術の原理なり「根本原則」を探索し、かつその原則が、古代と近代の歴史的変容して現れる様を考察しようとする高められた立場からの「模倣」であった。

1794年の断章草案群に冠された「古代研究と近代研究の調和」<sup>(13)</sup>という標題が早くもこの間の経緯を物語っている。このような研究姿勢は、毀誉褒貶半ばするとはいえ、初期ロマン派の理論的主導者としてのシュレーゲルの名を高らしめた世紀転換期まで不変であったといえよう。シュレーゲルは、1794・95年の段階からほぼ五か年を経過した1800年に、その間の自己の思索の成果を述懐しながら、ある断章草案に次のように記している。

古代人と近代人の調和は私のポエジー全体の精神であるように思われる。(圈点筆者；LN-1729)

われわれはここにいう「古代人と近代人」を、もちろん、「古代の古代性と近代の近代性」と言い換えることはできる。だが、さらに「古代の近代性と近代の古代性」と言い換えることも、単に可能ではなく、上述したシュレーゲルのスタンスでは、また必然なのである。ここでまた、シュレーゲルがいう「調和」(Harmonie)という表現にも注意を促したい。この表現は、結果としての静止状態における宥和を意味しない。対立項の無限の交替、対立する原理の無限の闘争という動的過程の渦中に表出する「調和」なのである。

## 2. 交換概念としての古代と近代

『研究論』とほぼ同時期に起草された『価値論』、すなわち『ギリシャ人とローマ人の研究の価値について』<sup>(14)</sup>の補遺論文には、上述した交換可能な「古代性と近代性」の問題に方法論的にアプローチする記述が見出される。すなわち、若きシュレーゲルがフィヒテから継承した

「交互規定」(Wechselbestimmung)ないし「交互作用」の形式に倣って、古代と近代の諸契機を可分的に交換可能とみなす実験的記述である<sup>(15)</sup>。そこではまず、「自由と自然の交互作用」(Wechselwirkung von Freiheit und Natur)が公理ないし「根本原則」として定立され、そこからいわば定理として、「自然」が優位に立つ「自然的形成」(natürliche Bildung)及び「自由」(ないし「精神」)が優位に立つべき「人為的形成」(künstliche Bildung)のシステムが、さらに、前者が古代世界に、後者が近代世界に対応することが導出される。そしてさらに——いわば系として——両世界の量的諸契機が「相互に対応する交換概念」(Wechselbegriffe)たるべきことが主張されるのである<sup>(16)</sup>。

ここにいう「根本原則」は、古代芸術と近代芸術の差異と同一を考察する際の歴史哲学的な方法論に関わる意味におけるそれである。上の1)に「高められた模倣」との関連で言及した「根本原則」とは、古代芸術と近代芸術に通底する芸術の普遍的形式に関わる意味におけるそれである。実はこの普遍的形式に関して、「はじめに」冒頭の引用箇所(KA I, S. 275)に引き続いて、シュレーゲルのさらなる問いかけが記されていた。

果たして、限定されたもの(das Beschränkte)が(無限定で)完全無欠なものに、有限なものが(das Endliche)(無限に)完成化したものに、個別的なもの(das Einzelne)が普遍的(allgemeingültig)になり得るといえるのか。人間世界において、芸術そのものと称しうるに相応しい芸術が存在するのか。永遠の芸術法則が可視的になる不滅の作品が存在するのか。(括弧内筆者：KA I, S. 275)

そして『研究論』の核心部には、一部にはカントの、一部にはフィヒテの概念と術語に拠って、諸芸術とその花冠をなすポエジーの普遍的形式に関して概ね以下の事柄が主張される。——「多様性」と(個別的)「統一性」は相互に否定し合う。だが、「総体性」(Allheit)は両者を統合して、真の全体性を志向する。芸術の精髓はまさにこの総体性に現れる。別けてもポエジーが目指すのは「個別的なもの」(das Einzelne)でなく、「普遍的」にして「無限定なもの」(das Unbedingte)である。「個別的なもの」に対処する「主観性」(Subjektivität)に対して、「客観性」、正確に言えば、「主観性」と「客観性」の総合である高次の「客観性」(Objektivität)こそ、無限定性と真の全体性を志向する。そして、「総体性」と同一視するべきこのような「新しい客観性」こそが、近代世界に要請された「美的革命」の根本原則をなす、と<sup>(17)</sup>。

ここで留意すべきは、若きシュレーゲルが、1794・95年の段階で芸術一般の普遍的形式を

論ずるに際して、「客観性」と「主観性」という極めて多義的な術語に拠ることであろう。当該箇所に入れられた内容は、当時シュレーゲルの立場に理解を示した『ドイッチュラント』誌の編集主幹ライヒャルトにも理解不能であったことを付記したい。

### 3. レアルとイデアルの弁証法、すなわちイロニー

シュレーゲルは上述した諸問題を恐らく自覚していたのであろう。1797年のリュツェウム＝フラグメンテのひとつの断章で読者に次のように釈明することになった。

ギリシャ人のポエジーに関する私の試み<sup>(18)</sup>は、ポエジーの客観性に対する自己流の散文的頌歌であった（と読者に釈明しなければならない）。そこに絶対に必要なイロニー（の精神）が欠如していたのが最大の欠陥であったと思われる。最高の成果は、だが、ポエジーが無限の価値を有することを（いわば）確信的な前提として、あたかも完成した事実であるかのように（読者に宣言したことである）。（括弧内筆者；LF-7）

実はほぼ同時期に、『ホーレン』誌を主宰するフリードリヒ＝シラーの『素朴文芸と情念文芸』<sup>(19)</sup>が完全な姿で世に問われた。若きシュレーゲルはシラーが唱える「情念文芸」と自己が主張した近代文芸の理想形態との間に多くの類似性を認めなくてはならなかった<sup>(20)</sup>。また叙述のスタイルでシラーに軍配が上がることも認めざるをえなかった。だが、シュレーゲルにも自負があった。すなわち、果たしてシラーは、フィヒテがいうレアルとイデアルの無限の闘争に関して、十分な知見を有していたのか。「無限なるものを求めて努力する全ての詩的描写が（シラーのいう）情感的に尽くされるとでもいうのか」<sup>(21)</sup>。この段階のシュレーゲルにいわせれば、イデアルとレアルの関係にまず十分な省察を巡らすこと、そしてそれを詩的に表現することがポエジーの課題に他ならないのである。批判の矛先はまたシラーの『美的教育書簡』<sup>(22)</sup>にも向けられる。すなわち、シラーはカント哲学の「自然と自由」の対立関係に——いわば事後的第三者として——シラーなりの美的理念を加層したに過ぎない。シラーも同書簡でフィヒテの「交互作用」の形式に一応注目する<sup>(23)</sup>。だが、果たしてシラーは革命的な哲学者フィヒテの知識学の精神を「全体の立場」<sup>(24)</sup>から十分に理解して主張しているのか、と。このように、若きシュレーゲルは1797年以降芸術とポエジーを論ずるにあたり、もはや「客観性」と「主観性」を主たる術語にすることなく、フィヒテが初期「知識学」、特に構想力論で展開する「観念的」（イデアル）と「実在的」（レアル）の対立と抗争に照準を合わせ、そこに現れる術語に拠って、シラーを批判する陣形を整えたのであった。そして期せずしてほぼ同時期に、

「神話」についても実験的考察に着手するのである。

(そもそも) 神話とは、レアルなものに対するイデアルな取り扱いなのであろうか。(括弧内筆者；PhLj II-889)

そしてやや遅れるが、ポエジーについてもまた、

ポエジーにおいて実在論 (Realismus) と観念論 (Idealismus) は、それが如何ようにみえようとも、ともかく極めて緊密に溶け合っているのだ。(PhLj V-248)

#### 4. 古い神話と新しい神話

上に提示された断章草案、すなわち 1798 年 (PhLj II-889) と 1799 年 (PhLj V-248) に起草されたふたつの断章草案に盛り込まれた着想が、いわば「進展する総合」(fortschreitende Synthesis) をなして<sup>(25)</sup>、世紀転換期に『アテネウム』誌に発表された『対話篇 ポエジー』に告知される「新しい神話」の構想に発展する。

1795 年の『研究論』では、古代神話と古代文芸はともに自然と一体化した素朴なファンタジーから生じた形象的言語の産物として同一であり、古代的人間形成の共通の根幹をなすことが示唆されるに留まった<sup>(26)</sup>。1800 年の同上『対話篇』の第一対話から第二対話への移行部でも近代文芸と近代神話の親和的關係が示される。敷衍すれば、シュレーゲルが 1795 年以来追求し続けた「新しい、高次のポエジー」と第二対話で開陳される「新しい神話」との同一性が示唆されるのである。

こうした「新しい神話」の構想について、詳しくは拙著第 5 章<sup>(27)</sup> を参照されたい。ここで限定的に再現すべきは、1) 古代文芸の全体を裏打ちする古代神話の源泉は、古代ギリシャ人の若々しいファンタジーであった。2) 個別的な諸契機がなお跳梁し、真の全体性への途上にある近代文芸は、全体を形成するという意味で「新しい神話」を創造しなければならない。3) そのような「新しい神話」は、「自己より発出し、自己に帰還する反省」の形式をオルガンとし、「観念論の胎内より生ずる無限の実在論」、すなわちポエジーとして現れるはずである。このような汎ポエジー的観念・実在論 (Panpoetischer Ideal-Realismus)<sup>(28)</sup> が近代文芸の無限の進展に然るべき方向性を与える。その方向性とは、近代的人間形成の進展において、ゲーテの

「ポエジーのポエジー」とフィヒテの「哲学の哲学」の総合が指し示す方向性である<sup>(29)</sup>。

因みに、シュレーゲルとフィヒテは「新しい神話」の構想について話し合った経緯がある。以下に抜粋引用するフィヒテのシュレーゲル宛書簡はその間の事情を物語る。同書簡でフィヒテは次のように記す。

私たちが昨年冬イェーナで話し合ったあなた（シュレーゲル）のポエジーの体系<sup>(30)</sup>の全容を、私は今やアテネウム誌の5号と6号で理解できることでしょう。（あなたがいう）ポエジーの素材の採り方に私は若干違和感を覚えますが、ポエジーの主要命題、なにかんづく形式については全く普遍的に示されており。（……）ひとえに一個の理性（Eine Vernunft）が存在するように、（全体として補足された）一個の真のポエジー（Eine wahre Poesie）もまた存在（すべきというあなたの考えに敬意を表します）<sup>(31)</sup>。

察するにフィヒテは、自身の批判的観念論が「間接的」な仕方であれ、シュレーゲルが予言者然として告知する近代世界の新しい神話の源泉であることに一定の理解と賛同の意を示したのであろう<sup>(32)</sup>。

このように、シュレーゲルのいう「観念論」と「実在論」は極めて独特な意味合いで使われる対概念である。哲学とポエジーそれぞれに対応するばかりか、世紀転換期には両者の総合が「ゲーテ＋フィヒテ」を暗示する「神話」の構想へと展開したのである。以下本論集所収第二論文でテーマ化するアテネウム22番の断章もまた、上記断章草案（PhLj II-899, V-248）と連動して、新しい神話の構想の一角に喰い込む勢いを有している。換言すれば、新しい神話の構想に連なる「進展する諸構想」（eine Progreßion von Projekten）のひとつなのである<sup>(33)</sup>。ここでは勿論「観念的」（イデアル）と「実在的」（レアル）の術語が重きをなす。だが、そこにいう「主観的」と「客観的」の術語は、1795年の段階のそれだけでなく、1798年フィヒテの知識学を全体の見地から把握した若きシュレーゲルによる対概念であることに留意されたい。

《注》

- (1) In der Serie: Ideal und Real, Bd. 7, 2016. ISBN-CH 978-3-643-90793-6. S. LIT news International Philosophy. www.lit-verlag.de
- (2) Kritik und Universalgeschichte. Studien zu den geschichtsphilosophischen und ästhetischen Ansichten Fr. Schlegels bis 1803/04.
- (3) KA I, S. 275: Wandelt Gottheit auch in irdischer Gestalt?



- (4) PhLj IV-460: Die Poesie bringt die Götter auf die Erde, die Philosophie erhebt die Menschen zu den Göttern.
- (5) LF-115: Die ganze Geschichte der modernen Poesie ist ein fortlaufender Kommentar zu dem kurzen Text der Philosophie: Alle Kunst soll Wissenschaft, und Wissenschaft soll Kunst werden; Poesie und Philosophie sollen vereinigt sein.
- (6) IF-96: Alle Philosophie ist Idealismus und es gibt keinen wahren Realismus als den der Poesie.
- (7) PhLj II-889: Ist Mythologie nicht die idealistische Behandlung des Realen?
- (8) Geschichte der Kunst des Altertums. In: G. Eiselein (Hg.); Winckelmanns Sämtliche Werke. Neudruck der Ausgabe. Osnabrück 1965, Bd.I.
- (9) Winckelmann allein ging vom Ganzen aufs Ganze, hatte Sinn und Geist fürs Alterthum. Zitiert aus Ch. Benne: Die Erfindung des Manuskripts. Zur Theorie und Geschichte literarischer Gegenständlichkeit. Berlin 2015, S. 421, Anm. 99; S. 473 und Anm. 104.
- (10) Wie Anm. 8, S. 8.
- (11) Vgl. mein Buch wie Anm. 1, [1. 1].
- (12) Ebd.
- (13) Über das Studium der Griechen und Harmonie desselben mit modernem Studium.
- (14) Vom Wert des Studiums der Griechen und Römer 1795. In: KA I, S. 621-642.
- (15) KA I, S. 631.
- (16) 詳細に観察すると、この間の記述には様々な論理的齟齬が含まれる。「歴史の哲学と芸術の哲学」(KA I, S. 347)の方法論的統合を目指す若きシュレーゲルの実験的考察の一齣とみなすべきであろう。これについては Walter Jaeschke: Die durchaus richtige Bestimmung des Begriffs. Zum Gedächtnis des frühen Schlegel, in B. Frischmann u. E. Millán-Zaibert (Hg.): Das neue Licht der Frühromantik, Paderborn 2009, S. 106-109 も参照。
- (17) Vgl. KA I, S. 290-291. この記述箇所も十分に省察された結果としての記述ではない。遂行論的かつ実験的な記述である。同箇所が『ドイッチュラント』誌を編集・出版するライヒャルトに理解不能であったことに関して、拙稿「進展かつ増大する塊量」, 明大教養論集 524 号 (2017 年 3 月) 参照。
- (18) 『ギリシャ人のポエジーの研究の (の意義) について』, すなわち『研究論』を指す。
- (19) Über naive und sentimentalische Dichtung. In: Benno von Wiese (Hg.): Schillers Werke, Nationalausgabe Weimar 1962, S. 413-503.
- (20) 特に「関心を惹く文芸」(interessante Poesie) に関して。Vgl. dazu mein Buch wie Anm. 1, [2. 2. 3].
- (21) KA I, S. 211.
- (22) Über die Ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen. In: Schillers Werke wie Anm. 19, Bd. XX, S. 309-412.
- (23) Dazu vgl. mein Buch wie Anm. 1, [2. 4. 2], [4. 3. 1] und [4. 3. 2].
- (24) Vgl. vor allem mein Buch, [4. 3. 2].
- (25) これについては、本論集に掲載された第二論文「アテネウム=フラグメンテ 22」14 頁及び第二章参照。
- (26) Vgl. KA I, S. 277, 351 u.a.
- (27) Vgl. mein Buch [5. 1] und [5. 2].
- (28) Ebd., [5. 1. 3]
- (29) Ebd., [5. 2. 2] und [5. 2. 3].
- (30) 『対話篇 ポエジー』の全体を指す。その中核的部分が第二対話篇「神話への講述」である。

- (31) Fichtes Brief an Fr. Schlegel vom 16. Aug. 1800. In: R. Lauth u.a. (Hg.): J. G. Fichte-Gesamtausgabe, Briefe Band IV, Stuttgart 1973, S. 281-285, hier: S. 282f.
- (32) Vgl. mein Buch [5.1.3].
- (33) Aus PhLj II-857. 第二論文「アテネウム=フラグメンテ 22」第二章参照。

### テキスト

#### Friedrich Schlegel のテキスト

- Friedrich Schlegels Philosophische Vorlesungen aus den Jahren 1804 bis 1806. Nebst Fragmenten vorzüglich philosophisch-theologischen Inhalts. Aus dem Nachlaß des Verewigten. Hg. von C. H. J. Windischmann. Bonn 1836/37.
- Friedrich von Schlegel's sämtliche Werke, 2. Original-Ausgabe. Wien 1846. Sigle: <sup>2</sup>SW
- Friedrich Schlegel 1794-1802. Seine prosaischen Jugendschriften. Hg. von Jacob Minor, 2 Bde., Wien 1882. Sigle: Minor.
- August Wilhelm und Friedrich Schlegel in Auswahl. Hg. und eingeleitet von Oscar F. Walzel. Erschienen in der Reihe Deutsche National Litteratur, hg. von Joseph Kürschner, Stuttgart 1891, Bd. 143.
- Friedrich Schlegels Philosophie der Philologie. Mit einer Einleitung hg. von Josef Körner. In: Logos. Internationale Zeitschrift für Philosophie der Kunst, Bd. XVII, 1928.
- Friedrich Schlegel. Neue philosophische Schriften. Erstmals in Druck gelegt, erläutert und mit einer Einleitung in Friedrich Schlegels philosophischen Entwicklungen versehen von Josef Körner, Frankfurt a.M. 1935.
- Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe. Hg. von Ernst Behler unter Mitwirkung von J. J. Anstett und H. Eichner. Paderborn 1958ff. Sigle: KA.
- Friedrich Schlegel. Kritische Schriften. Hg. von W. Rasch. München <sup>3</sup>1971.
- Friedrich Schlegel. Literary Notebooks 1797-1801. Hg., eingeleitet und kommentiert von Hans Eichner. London 1955. Jetzt unter dem deutschen Titel: Literarische Notizen. Einleitung u. Kommentar, übersetzt und bearbeitet von H. Beese. Frankfurt a.M. 1980.
- Friedrich Schlegel: Studien zum Altertum; Über das Studium der Griechen und Harmonie desselben mit modernem Studium; Aus der politischen Abhandlung über Revolution und Republik. Zu diesen noch unveröffentlichten Texten vgl. Ch. Benne u. U. Breuer (Hg.): Antike-Philologie-Romantik. Fr. Schlegels altertumswissenschaftliche Manuskripte, Paderborn 2011, S. 244.

#### 略号

Fr. Schlegel のテキストは主として上記 KA より引用。その際 KA II 所収の Athenäums-, Ideen- und Lyzeums-Fragmente は各略号 AF, IF, LF に頁数でなく、断章番号を直結して示す。例：LF-37=Lyzeums-Fragmente Nr. 37, in KA II, S. 151.

KA XVIII u. XIX 所収の Philosophische Lehrjahre の断章草案は略号 PhLj に Heft 番号 (ローマ数字) と Notiz 番号 (アラビア数字) を直結して示す。例：PhLj IV-460=Philosophische Lehrjahre, IV. Heft, Nr. 460, in KA XVIII, S. 231.

Literarische Notizen からの引用は略号 LN に Notiz 番号を直結して示す。例：LN-2090, in LN, S. 211.

**Fr. Schiller のテキスト**

Benno von Wiese (Hg.): Schillers Werke, Weimar 1962.

**J. G. Fichte のテキストと略号**

Fichtes Werke, hg. von Immanuel Hermann Fichte, fotomechanischer Nachdruck, Berlin 1971. Sigle: F-SW

J. G. Fichte-Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, hg. von R. Lauth und H. Gliwitzky. Stuttgart-Bad Cannstatt 1964ff. Sigle: F-GA

J. G. Fichte. Wissenschaftslehre nova methodo. Kollegnachschrift K. Chr. Krause 1798/99. Hg. sowie mit Einleitung und Anmerkungen versehen von E. Fuchs. Hamburg 1982.